

Ravelstein のメッセージ

半 田 拓 也*

ソール・ベロー（1915–2005）の最後の作品となった小説『ラヴェルスタイン』（*Ravelstein*, 2000）は、大きく分けて次の3部からなっている。第1部（1–93）では、政治哲学者ラヴェルスタイン（Abe Ravelstein）の著作がベストセラーになり、成功に高揚しバりに遊ぶラヴェルスタインと彼の親友である語り手のチック（Chick）を中心として、華やかで陽気な場面が描かれている。第2部（94–159）は、一転してそのラヴェルスタインが「HIV陽性」（HIV-positive）（94）であり、「キラン・バレー（Guillain-Barré）（98）症候群を始め種々の疾病に罹り、死に至る様子を描いている。第3部（160–233）は、チックの食中毒による病院搬送、集中治療室（ICU）での生死の彷徨い、チックの妻ロザムンド（Rosamund）の献身的な看病やチックのリハビリを中心に描き、チックが生前のラヴェルスタインを回想するシーンで結んでいる。

したがって、このような構成をもつこの小説の一つの読み方は、第1部と2部がラヴェルスタインの伝記的小説（あるいは小説的伝記）であり、第3部はチックの臨死体験とチック夫妻の病闘記とみなすことができる。他の読み方は、ラヴェルスタインとチックの二つのストーリーは、独立したのではなく、両者は密接に関連しているから、全体としてこの小説を構成しているとする見方である。後者の読み方では、チックの妻ロザムンドはすでに第1部に登場し紹

* 福岡大学人文学部教授

介され、また第3部でラヴェルスタインのことが夫妻の話題になるばかりではなく、小説のコーダとして、元気だった頃のラヴェルスタインを回想して小説が閉じられることから、小説全体としてはラヴェルスタインを描き、後半にチック夫妻の物語を埋め込んでいると言うことができるだろう。実際、この小説の献辞には、(ロザムンドのモデルとなったベローの妻) Janis へとあり、また第3部ではロザムンドの的確な判断と献身的な看病と愛情が感謝に満ちた筆致で描かれていることから、この小説においてベローは、ラヴェルスタインの生前をチックに自由に語らせながら、同時に実の妻 Janis に対する率直な感謝を表現することに成功しているとするのは、自然なことと思われる。

本論文では私は、この小説でベローが読者に伝えたかったメッセージとは何かを考察したい。承知のように、ベローはラヴェルスタインのモデルとなったアラン・ブルーム (Allan Bloom, 1930-1992) のベストセラー『アメリカン・マインドの終焉』(*The Closing of the American Mind: How Higher Education Has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today's Students*, 1987) に序文 (Foreword) を寄せていて、ブルームの著作に対して深い理解と共鳴を表明している。小説『ラヴェルスタイン』でベローはラヴェルスタインの著作の概要を示し、そこでもチック (ひいてはベロー) の共感を書き込んでいる。そこで、ベローがこのように共感するブルームの思想の特徴を調べ、ブルームとベローの共通点 (あるいは親和性) と違い (あるいは相補性) を探ることが、小説のメッセージを考察することに繋がると思われる。さらに、小説に登場するチックの妻ロザムンドは、ベローの妻 Janis に非常に近いと思われる。これは、ロザムンドが私 (正確には私たち夫婦) が2001年5月ボストンでベローの自宅に招かれた折にお会いした Janis 夫人の印象とも、とてもよく重なり、また Atlas の伝記 *Bellow: A Biography* で描かれている Janis のイメージとも重なるように思われるからであるが、このロザムンドの存在についても考察したい。

1

上の序文で、私は小説のチックはベローに近いといった主旨のことを述べたが、ベローの他の小説や評論を読み、ベローの考え方や感じ方に親しんでいる読者には、チックが発する言葉や感情がベローに非常に近いと感じ取られると思う。両者が100%同じであるとは言えないが（作品と作家を峻別する新批評を持ち出すまでもなく）、両者はほぼ同じと言っていいくらい近いのではないだろうか。では、ラヴェルスタインの場合はどうか。私には、ラヴェルスタインとそのモデルとなったアラン・ブルームとの距離は、チックとベローの距離以上に近いのではないかと思われる。なぜなら、一つには、すでに指摘されていることであるが、ベローがブルームの葬儀に際して読んだ追悼文で述べられたブルーム像と小説のラヴェルスタインは酷似しており、追悼文で使われたフレーズがそのまま使われている場合すらあるからである。これにラヴェルスタインがチックに伝記を書くように頼んだという文脈を考えれば、ベローはラヴェルスタインをできるだけブルームに近づけ、小説をリアルなものにするよう心を配ただろうと思う。自分のことであれば、多少のフィクションを交えてもおかしくないが（チックの場合がそうであるかもしれない）、親友をモデルとした伝記的小説を書く際には、真実からかけ離れた描写は排除したいというのが人情ではないだろうか。それはともかく、ブルームの死に際して読まれたベローの弔辞は、ブルームの考え方や生き方を述べ、彼が交友を愛し（Allan loved company）、崩壊寸前の文明を救おうとして身をもって戦ったこと、ブルームほど才能のあった人間はいなかったと述べて、感動的である。

At home, as if at a command post, he had intelligence coming in continually. Friends phoned from London, from Paris, from Washington, with advance information about important decisions in the making and political news soon to

hit the papers. (“Allan Bloom” 276)

この引用では、自宅で世界各地にいる教え子から最新の情報を集めている様子が描かれ、政治に関する情報は新聞紙面を飾るだろうと述べている。次に引用する箇所では、ブルームが（日本の）着物を着て、強いコーヒーを飲み、たばこを日に5・6箱近く吸っていたと述べた後、ブルームが文明の危機を救おうとしていたことをユーモアを交えて述べている。この姿は小説のラヴェルスタインと重なる。

And what were the campaigns that he was running from the twelfth floor of the Cloisters—dressed in his Japanese robe, drinking powerful coffee, and smoking something like five or six packs of cigarettes daily? They were the war of a frail civilization on the point of being shattered. In the early years of our friendship, I would kid him about this—“You’re holding the whole thing together”—but it presently became clear to me that it was all most serious and most real: that he actually did have what it took to put it all together. (276–77)

ペローは始め冗談半分に「君は全体をまとめようとしているわけだ」と言ったが、やがてそれが大変真剣で現実的なものであると分かり、アランが実際に文明をまとめる力をもっていたと述べている。アランは安楽椅子に座った救世主ではなく (He was no mere armchair savior.)、旗色を鮮明にする勇気、アメリカ社会を素っ裸にして分析する大胆さがあった。そのために激しく非難もされたが、ペローは、人はあからさまな真実を語られると我慢できないものだとして述べている。ペローは、ブルームは保守主義者に仕立てられたが、実は保守主義者ではなく、また当世風のリベラルでもなく、根本に立ち返るラジカルであ

り、また文学を理解する文人でもあり、情熱的な教育者であったと述べている。そして、ベローはブルームほど才能ある人間はいなかった、ブルームは周りの人々を感化し変えた、私たちはそれを証明するためにこの葬儀に集まったのだ、と次のように締めくくっている。

I have known and admired many extraordinary persons in the long life I have been granted, but none more extraordinary than Allan Bloom. . . . And the truth is, about those who were taught by him or who grew to be close to him, that he changed us. Nobody was ever the same again. We are here today to testify that. (279)

この結びでは「彼は私たちを変えた」(he changed us) という点が強調されている。1992年の弔辞であるが、変化、change がキーワードであった。

では、アラン・ブルームはそのベストセラーの著作『アメリカン・マインドの終焉』で何を訴えたかったのであろうか。ここで382ページもある、この大著を要約するのは、ベローも『ラヴェルスタイン』の中で書いていたように、大変難しいことであるが、幾つかの主要なポイントに注目してみよう。扉に献辞として“To My Students”と書かれていることから、本書は第一義的には学生を対象にとして書かれたものと考えられるが、ブルームの批判は学生だけでなく、教授や知識人、大学にも及んでいる。

まず、ブルームが大きな問題と感じていることの一つは、学生を始めとする人々のアパシー(無感覚)であると考えられる。アメリカの独立宣言で謳われた自由と独立、平等や進取の精神が薄れているという指摘である。「アメリカには一つの物語がある。すなわち、自由と平等が途切れることなく、避けがたく進歩していくという物語である」(54)とブルームは書いているが、この理念は今や、違いは何でも認めてしまう相対主義と変化し、情熱や感動がなくなっ

たと指摘している。違いは何でも認めてしまうために、他者に対する関心や交流の意欲が低下しているとも指摘している。また、「書物を読まなくなったために、現代の学生の精神はより狭く、より浅くなった (narrower and flatter)」とも述べている。ブルームは続けて、この「狭い」というのは、彼らが最も必要なもの、つまり現状に対する不満と他に選択肢があることに気づくための、真の基礎に欠けていることを指し、「浅い」というのは、彼らが物事を解釈せず、詩情をもたず想像力も働かさないために、魂 (soul) が本性を映し出す鏡でなく、身の回りのものを映す鏡にすぎなくなっていることを指すと説明している (61)。ブルームは「きずな」(Relationship) というチャプターで、今では学生同士の同棲は「ガール・スカウトに加入することのように日常的」(98) になり、学歴の高い人々の間では、どんな時に結婚に踏み切ることが多いかという「注意が散漫になったときであるように思われる」(Among the educated, marriage these days seems to be best acquired . . . in a fit of absence of mind) (123) と皮肉っている。以上のような無感覚の状態は、小説『ラヴェルスタイン』では、例えばラヴェルスタインが教室で大学生に「諸君は何をもって、諸君の魂の欲求を満たすのだ」(“With what, in this modern democracy, will you meet the demands of your soul?”) (19) と問いかけるシーンなどに見られると言えよう。

「魂」という言葉は、ブルームのこの著作のキーワードの一つであるが、ベローの著作全体のキーワードでもあり、目に見えない、心の内奥を見つめる姿勢は両者が共有するものである。ベローの著作等における「魂」の意義については、多くの批評があるが、その一つとして拙論「ソール・ベロー序論—死生観と『おくりびと』を中心に (II)」があるので、参照されたい。また、ベローは『アメリカン・マインドの終焉』に寄せた序文のなかで、「ひどい混乱の中にも、なお魂に通じる開かれた水路がある」(In the greatest confusion there is still an open channel to the soul.) (16) と述べている。

ブルームの批判は、学生から大学へ広がっている。昔は自由の砦であった大学が、今では社会の要求をそのまま受け入れることによって、大切なものを見失っているという指摘である。専門化が進んだり、今日的なクラスが増えたりする一方で、哲学や文学などの一般教養教育が軽視されていると批判している。ブルームにとって教育とは、子供たちが感じているものと、その子供たちが将来できることとなすべきこととの間に自然の連続性をもたらすことであり、感情が伴わなければ、どんな教育も形骸化したものになる (Education is not . . . but providing a natural continuity between what they feel and what they can and should be. . . Without the cooperation of the sentiments, anything other than technical education is a dead letter.) (80)。ベローはこのことを『ラヴェルスタイン』では、「アメリカでは素晴らしい技術訓練を受けることができるが、教養教育は消滅寸前である」と要約している (A summary of his argument was that while you could get an excellent technical training in the U.S., liberal education had shrunk to the vanishing point.) (47)。

ブルームの大学批判には、教授や知識人が含まれていることは勿論で、この点もブルームとベローの共通点の一つである。町田哲司氏は『ソール・ベロー II — “Soul” の伝記 序説—』(2006) のなかで、「Bellow は、自己の最深部にある超越的メッセージの発信者である “soul” の声に耳を傾けることを主張する。“Soul” は…われわれが真実に生きる拠り所である」と述べた後、それは「大学教育が提供してくれるものよりも、はるかに信頼できるものなのである」(2) と書いている。ベローの大学教育批判は一貫しており、例えばノーベル賞受賞演説 (“The Nobel Lecture”) では、アメリカでは過去 40 年間に何百万人もの人々が「高等教育」を受けたが、それは多くの場合、「疑わしい祝福 (a dubious blessing)」(319) であつたと言ひ、貧しい人間像を描く主義や思想が優勢な現在、「私たちは身軽になり、厄介な荷物を投げ捨てることが必要である」と述べている。また、「魂の問題」 (“A Matter of the Soul”) という

評論では、「この国の問題の一つは、教育を受けた人々の愚かさ、移り気、俗物根性である」と言い、次のように言っている。

ドラッグストアの書架からフォークナー、メルヴィル、トルストイのペーパーバックを手にする若い労働者の方が、同じ作家たちについての「解釈」を教師に教えてもらい、エイハブの鉤が何を象徴しているかや、『八月の光』にどのようなキリスト教の象徴があるかを答えることができる、あるいはできると思っている文学士 (BA) よりも、希望を持つことができると私はしばしば思う。単科大学と総合大学では、小説や詩に対する情熱を育てていない。(76)

教師として私たちは、詩や小説に対する情熱を教室で育てているだろうか。

ベローの大学・知識人批判は、先に触れた『アメリカン・マインドの終焉』に寄せた序文のなかでも強調され、次のように繰り返されている。「私から見て、これは教授の本ではなく、作家が [学者] より頻繁に引き受ける危険を進んで引き受けようとする思想家の本である」(To me, this is not the book of a professor, but that of a thinker who is willing to take the risks more frequently taken by writers.) (12)。「こうしてブルーム教授は、現代の精神的戦いの前線で闘う戦士であり、その点で、私と非常に気心が合うのだ」(So Professor Bloom is a front-line fighter in the mental wars of our times, and as such, singularly congenial to me) (12)。「大学はしばしば有害な影響をおよぼす概念を社会に送り出す倉庫になっている」([T]he university has become society's conceptual warehouse of often harmful influences) (18)。「私にとって大学は、ずっと脱衣の場所であり、悪しき思想を放棄するという骨の折れる仕事をする際に助けを発見できる場所であった」(For me, the university has been the place of divestiture where I am able to find help in the laborious task of dis-

carding bad thought.) (17)。そしてベローは、この序文を次の文章で結んでいる。

この本は・・・伝統の単なる上澄みを掬ったものではなく、民主主義国アメリカで高等な精神生活がどのように発達したかを徹底して明確に語った、精確な歴史的要約であり、信頼のおけるレジюмеである。(18)

2

ここで、小説『ラヴェルスタイン』に特有な「愛」の概念について、触れておきたい。この小説では、一般的な友情や恋愛、家族といった概念の他に、「プラトンのエロス」(the Platonic Eros) と「ルソー的なロマンチックな愛」(Rousseauan romantic love) という概念も用いられている。

「プラトンのエロス」はラヴェルスタインがロザムンドとチックの関係に強い関心を示したという文脈で導入されている。すなわち、ラヴェルスタインが「年上の男性を好きになる女性がいるものだ」とチックに言った際に、チックはラヴェルスタインが「憧れ」を非常に大切なものと思っていたと述べ(He rated longing very highly.)、愛を求めたり、恋をしたりするのは、(アリストファネスが言ったように)人間が失った自分の半身に焦がれているからであるとラヴェルスタインは考えていたと言う。チックはこの神話を次のように素描する。

In the beginning men and women were round like the sun and the moon, they were both male and female and had two sets of sexual organs. In some cases both the organs were male. So the myth went. These were proud, self-sufficient beings. They defied the Olympian Gods who punished them by

splitting them half. This is the mutilation that mankind suffered. So that generation after generation we seek the missing half, longing to be whole again.
(24)

つまり、初め男と女は太陽や月のように丸く、男性器と女性器の両方があったが（両方とも男性器の場合もある）、彼らはオリンピアの神々に反抗したため、罰を受けて半分に分断された。人類はこの分断に苦しむことになり、幾世代も一体になろうとして、失われた半身を求めるという主旨である。チックはラヴェルスタインと一緒にいると、プラトンの『饗宴』に立ち返らざるを得ないという。「人間であるとは分断されていることである」(To be human was to be severed, mutilated.)、「分断された人類の活動は失われた半分を求めることである」(The work of humankind in its severed state is to seek the missing half.)が、この渴望は満たされることはないという。そして「エロス」とは、この分断を埋めるものであるが、性的抱擁は一時的なものに過ぎず、分断されているという意識は永続的なものであるという。

Eros is a compensation granted by Zeus—for possibly political reasons of his own. And the quest for your lost half is hopeless. The sexual embrace gives temporary self-forgetting but the painful knowledge of mutilation is permanent. (24)

チックはこの考え方を理解して初めてラヴェルスタインを理解できるという。ラヴェルスタインによれば、「渴望がなければ、人の魂は一夏海岸で使うと用なしとなる中古タイヤのチューブみたいもの」(Without its longings your soul was a used inner tube maybe good for one summer at the beach, nothing more.)であり、活動的な男女（特に若い男女）は恋愛に夢中になり、ブルジョ

アは死の不安でいっぱいである (25)。このエロスの愛の描写は、小説の中頃でも例えば “Eros is a *daimon*, one’s genius or demon provided by Zeus as a compensation for the cruel breaking up of the original androgynous human whole.” (82) と繰り返されている。ラヴェルスタインのヒットした本の仮の書名は、「渴望なき魂」、「Souls Without Longing」(83) であった。

他方、ルソー的な愛は個人と社会を結びつけるものとされ、次のような文脈で説明されている。

He [Ravelstein] had assumed the role of the benevolent intercessor, counselor, arranger. This was, in part, due to the influence of Jean-Jacque Rousseau, the political theorist and reformer. But he had initially been drawn to Jean-Jacque by his strong belief in the love that knits persons and societies together. (139)

ラヴェルスタインはチックとロザンムンドの取り持ち役を引き受けるつもりであったが、これには政治理論家であり改革者であったルソーの影響もあった。しかし、ラヴェルスタインはもともと個人と社会を結びつける愛を信じていたから、ルソーに惹かれたのだとチックは述べている。ラヴェルスタインは、ロザンムンドのことで、チックから相談があると思っていたかもしれないが、チックは自分のことは自分で決めたいという気持ちから、相談しなかった。ラヴェルスタインが二人の親密な関係を知ったのは、そうした関係になって一年ほど経った頃だった。しかし、ラヴェルスタインは、二人が結婚したことを知って、気を悪くするようなことは全くなかった (I have to say, however, that when we did get married he was quite good-natured about it, showing no resentment.) (139)。チックは「愛」なしでは、ラヴェルスタインを語ることはできないと繰り返す。

Love is the highest function of our species—its vocation. This simply can't be set aside in considering Ravelstein. He never forgot this conviction. It figures in all his judgment. (140)

ラヴェルスタインにあっては、愛こそが人間の最高の機能であり、使命であった。愛は彼のすべての判断で重要な位置を占めていたのである。チックはラヴェルスタインが学生に大変な興味を示したことや (25-26, 82)、世界の各地で働く教え子から絶えず情報を入手している様を描いているが、ここに自己を世界に関係づけて止まないラヴェルスタインの姿がある。Eric Freeze は “Reading *Ravelstein*” という論文のなかで、「ラヴェルスタインは自分の諸関係によって定義される人間の典型である」 (Ravelstein is the epitome of a man defined by his relationships) (24) と述べ、チックにとっては、“He [Ravelstein] has more connections than a switchboard” (113) という表現ですら、世界中にいる外交官、学生、弁護士、政治家、思想家とラヴェルスタインの繋がりを表すのには十分ではないと論じているが、これは誇張ではない。

さて、ブルームとベローの共通点という問題に戻れば、このように「魂」や「愛」を心の最深部におく二人が、現代の心理学に満足できないのは、想像に難くない。

ブルームの学問批判にはフロイトなどの心理学が含まれているが、フロイト批判は、ベローでは馴染みのことである。ただ、両者の批判の姿勢には若干の違いもあり、二人の人物像の違いを教えてくれる。ブルームは、フロイトの心理学は「ブシュケー、つまり魂なき心理学であると分かった」 (But it turned out to be psychology without the *psyche*, i.e., without the soul.) (136) と書いている。ブルームはまたフロイトの心理学は、その理論を生物学の上に基礎づけて、精神的な現象を説明しようとするため、双方を損ねているとも論じている。ブルームにとって、フロイトの心理学は「一貫性のない、様々なものの混

合物」(various incoherent mixtures)である(193)。これに対してベローには、イデオロギーやシステマティックなものに対する批判や不信が根強い。ベローは、フロイトの無意識には何が入っているかあらかじめ分かっていると考え、人間の神秘はどこへ行ったのだろうかと嘆いている。次の引用は『学生部長の12月』(*The Dean's December*, 1982)からのもので、これは主人公のコルド(Corde)の友人スパングレー(Spangler)が、主人公を批判するために、コルドが精神分析を批判した言葉をコラムに紹介した箇所である。『学生部長の12月』の全編を通して、ベローの共感のコルドにあるので、この言葉は、結局ベローの精神分析批判とあると考えられる。

“Psychoanalysis pretends to investigate the Unconscious. The Unconscious by definition is what you aren't conscious of. But the Analysts already know what's in it. They should, because they put it all in beforehand. It's like an Easter Egg hunt. You hide the eggs and then you find 'em.” (298)

精神分析は無意識を探求するふりをするが、分析家は無意識に何があるかは初めから分かっているから、その有様は、丁度イースター(復活祭)の卵探しみたいなもので、隠した卵を見つけるだけだとベローは揶揄している。ユーモアのある皮肉は、いかにもベローらしい。ちなみに、ベローはユングの心理学も体系化されたシステムと見て批判的であったが、『ラヴェルスタイン』では、ユングを批判しているようには思われぬ。先妻のヴェラ(Vela)を描くところで、彼女には特有のアニムス(animus=女性の無意識に存在する男性的なもの)があるのだろうかというユングの用語を使ってコメントし、中立的に見える(124)。

ブルームとベローのさらなる親和性として、音楽が挙げられると思う。ブルームは『アメリカン・マインドの終焉』の音楽と題するチャプターで、ロッ

ク・ミュージックを批判し、ロック・ミュージックこそが唯一の若者の文化であり、これに対抗できる精神栄養剤はないと皮肉っている (75)。ロックは若者の想像力を衰退させ、若者が芸術と思想に対して情熱的な関係を結ぶのを妨げていると考えている (79)。Gustavo Sánchez Canales は “Life, Death and Aristophane’s Concept of Eros in Saul Bellow’s *Ravelstein*” という論文で、ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』を簡素に要約し、学生が考える訓練を受けていないこと、学生が歴史的な文脈で思想を分析することに興味をもたないこと、大学が学生に教養科目を提供していないことが問題であり、ブルームはこれらの元凶としてロック・ミュージック、テレビ、大学（知識人）のエリート主義の3点を挙げているとしているが (11)、これは簡素にして適切な要約と言えよう。ブルームが愛するのはロックとは別の種類の音楽であり、小説では、ラヴェルスタインは自宅で、スピーカーは1本100万円もしそうな最新型のステレオ装置で、クラシックのCDなどを大音量で楽しんでいる様子が描かれている。ベローの場合も音楽に対する造形が深く、講演記録である “Mozart: An Overture” というエッセイには、子供の頃からヴァイオリンのレッスンを受けていたばかりでなく、中年になるまでは、同類のアマチュア音楽家を見つけては、二重奏や三重奏に編曲されたモーツァルトのソナタを演奏して楽しむこともあったとある (I did, somehow, learn to fiddle adequately, and until middle age I was on the lookout for amateur musicians like myself and had the pleasure occasionally of playing Mozart sonatas arranged for duets and trios.) (2)。私は例の2001年の自宅訪問で、ベローが目の前でリコーダーの演奏をしてくれるという幸運に恵まれたが、それは見事な演奏だったと今でもよく思い出す。曲は、バッハの「アンナ・マグダレーナ・バッハの音楽帳」からト長調のメヌエット (BWV Anh. 114) であった (この曲は正確にはペツォルトの作とされている)。ベローの作品のなかでも、音楽に関する言及やメタファーは多く、『ラヴェルスタイン』のなかでは、チックが生死をさ迷う夢のなかで、

Vela の言った “marriage” という言葉に “B-flat A, B-flat C” の装飾音があったと書いているのが印象的である。

小説『ラヴェルスタイン』には反ユダヤ主義に対する批判が散見されるが、ブルームとベローが「魂」というキーワードで結ばれている以上、当然のことであると言えよう。佐伯彰一氏は『作家伝の魅力と落とし穴』(2006) のなかで、『ラヴェルスタイン』で描かれる東欧出身の宗教学者に戦前のナチスとの関係が仄めかされている点に触れ、「本筋とのつながり希薄と眩かずにいられない」(145) と不満を述べているが、魂や愛を主題とする二人のユダヤ人にとっては自然なことではないだろうか。

上に述べたように、ブルームとベローは、幾つかの重要な価値観や性向、人生に対する姿勢を共有している。したがって、小説『ラヴェルスタイン』で述べられるラヴェルスタインとそれに共鳴するチックのメッセージは、大局的には作家ベローのメッセージでもあると考えることができる。

3

ブルームとベローは共通している点が多い一方で、異なっている点もある。両者の違いはお互いを補うもの、すなわち相補の関係にもあると考えられる。批評文献にも、この相補性を指摘したものがあり、Eric Freeze の次の文章はその一例である。

It's through Chick's narration that Ravelstein's picture emerges. Additionally, it's also through his picture that we come to know Chick. In this sense, Chick and Ravelstein are interdependent. (26)

Freeze は、ラヴェルスタインの人物像が明らかになるのはチックの語りによっ

てであり、またラヴェルスタインの人物像によって読者はチックという人物を知るようになるのであり、この意味で、二人は相互依存の関係にあると論じている。ここでは、こうした相互補完性を別の観点、すなわち両者の学識、性格や観察眼、また死後の生（魂は不滅かどうかという問題）についての意識という観点から、考察してみたい。

ベローには失礼な表現となるかもしれないが、小説のラヴェルスタインとチックには学識の差があるように思われるのは否定できない。チックは『ラヴェルスタイン』のなかでも謙虚にその差を認めており、ラヴェルスタインのベストセラーの内容を紹介するときも、ラヴェルスタインほど詳しくないとか、要約するのは難しいがというような前置きをしている。小説のなかで、チックはラヴェルスタインの本は騒々しいものではなく、知識と分別があって、議論は完全に論拠が示されていた (Ravelstein's book was not at all wild. . . . No, he was sensible and well informed, his arguments were thoroughly documented.) (47) と書いている。これは現実のブルームとベローの関係を反映したものではないだろうか。

この点について、より具体的なイメージを描くには、ベローとベローの朋友キース・ボッツフォード (Keith Botsford) の関係を考えると、分かりやすいかもしれない。周知のように、ボッツフォードとベローは1950年代初めからの友人で、二人は第一級の文芸誌の不足を補うという目的で、*The Noble Savage* (60年代)、*Anon* (70年代)、*New from the Republic of Letters* を共同編集してきたが、私はボッツフォード教授に半世紀もの永い間友人であり続け、編集のパートナーシップを組むことができた理由を尋ねたことがある。そのとき教授は、一つは文学に対するスタンスが基本的に一致していること、文学作品の質を見る目、評価の基準が共通しているということを挙げられた。しかし、ボッツフォード教授は続けて、二人には対照的な点もあり、ベローが多くの思想家の高邁な思想に精通しているのに対して、自分はこの分野はベローほど詳しく

はないと認めていた。また、性格的にはベローは自己を曲げず妥協しないところがあり、時として周囲の人との間に軋轢が生じることもあるが、自分（ポッツフォード）は周囲と仲良くできる性格ということであった。ポッツフォードはこれまでベローと喧嘩をしたことはないが、これは自分がベローに合わせるができるからだとも言っていた。このように、思想に強いベローと実際のポッツフォードは補完的であると言えるが、これと同じような関係がブルームとベローにもあったのではないかと思われるのである。再度 2001 年のベロー宅訪問の話となるが、そのときベローとポッツフォードのやりとりを眼の前で見聞きし、お互いを必要とし合っている様子から、ブルームとベローも、同じような関係ではなかったかと想像できる。

『ラヴェルスタイン』のなかで、ベローはラヴェルスタインとチックの性格や観察力の違いについても触れている。ラヴェルスタインの性格は強く、チックはラヴェルスタインの内部構造は自分より強いと言い (his life had more inner structure than mine)、チックは現実を見る目をラヴェルスタインに頼っている (I had become dependent on his power of ordering experience) (187)。観察眼については、チックは eagle と flycatcher、つまり鷲とタイランチョウの差があると書いている (101)。また、ラヴェルスタインはチックより社交性があり、性格も明るかったとある (Abe's character was far more cheerful than mine—a wide-open broad-daylight outlook) (167)。

さらに、ラヴェルスタインはチックを評価するばかりでなく、必要としている (he also needed me) (187)。ラヴェルスタインがチックを評価するのは、作家としてチックが重要な問題を扱っていると考えからであり (he told the students that there was no important subject I hadn't thought about) (40)、またチックが作家としての才能に恵まれていると思っているからである (Ravelstein believed that I was gifted and bright but uneducated, naïve and passive—inward) (40)。ラヴェルスタインはチックの描写の仕方も気に入っている。

ベローの読者にはベローの描写のスタイルは、詳しく述べる必要はないであろうが、ここでベローのスタイルを確認しておこう。ベローは、先にも触れたモーツァルト論“Mozart: An Overture”のなかで、モーツァルトの手紙を引用し、モーツァルトが観察者として優れており、「モーツァルトには細部を描写することで人物の性格を捉える小説家的な才能がある」(Mozart has the novelist's gift of characterizing by minute particulars.) と述べているが、ベローが引用しているモーツァルトの手紙の一節を読むと、ベローが書いたものと見紛うほどよく似ていると感じられる(そう感じるのは私だけであろうか)。次はそのベローの引用の一つで、ボローニャのドミニコの修道士についての描写(his description of a Dominican monk from Bologna) (1770年8月21日)である。

... regarded as a holy man. For my part I do not believe it, for at breakfast, he often takes a cup of chocolate and immediately afterwards a good glass of strong Spanish wine; and I have myself had the honor of lunching with this saint who at table drank a whole decanter and finished up with a full glass of strong wine, two large slices of melon, some peaches, pears, five cups of coffee, a whole plate of cloves, and two full saucers of milk and lemon. He may of course be following some sort of diet, but I do not think so, for it would be too much; moreover, he takes several little snacks during the afternoon.

(7)

この修道士は聖人と言われているが、ぼくにはそうは思われたい、なぜなら、この人は朝食にココアを飲んだすぐ後にスペインの強いワインをたっぷりグラス一杯飲んだ、この聖人と昼食をする名誉に浴したが、この人はデキャンターをまるまる一本空けた後、強いワイン、大きな二切れのメロン、桃、梨、コーヒー5杯などを召し上がる、食事療法かもしれないが、そうは思えない・・・

とモーツァルトは書いている。ベローは、外出するためにいそいそと身支度をする元気いっぱいのラヴェルスタインの姿を描写して、小説『ラヴェルスタイン』を終えているが、このエンディングを抽象的な言葉ではなく、動く絵を見るようなタッチで書いている。ラヴェルスタインは特別にクリーニングされたシャツを着て、糊のきいたカラーを上げて、ネクタイを大きく豪華に結ぶ。それからベッドに座り、ブーツを履く。その間もたばこを吹かしているのだが、左足は右足より数サイズ小さい。ステレオセットはロッシーニの曲を最大音量で吹き出している。5,000 ドルのスーツを着て・・・とベローは描写し、最後は「人は、ラヴェルスタインのような人間を簡単には死に引き渡さないのだ」(You don't easily give up a creature like Ravelstein to death.) という文章で結んでいる。Joel Salzberg は論文 “The Importance of Being Saul Bellow: Narcissistic Narrative and the Parodic Impulse in *Ravelstein*” のなかで、『ラヴェルスタイン』の最後のセクションは殆どチックとロザムンドの話であり、ブルームの回想録を書くというベローの当初の目的は実質的に無視されていると述べているが (The last section of *Ravelstein* is almost entirely Chick and Rosamund's story Bellow's original motive for writing Bloom's memoir is virtually ignored.) (49)、これはやや誇張した表現ではないだろうか。

ラヴェルスタインとチック、ひいてはブルームとベローのもう一つの違いは、死後生についての考え方である。ベロー小説における死のテーマとそれに付随する死後の生についてのベローの感覚については、拙論「ソール・ベロー序論—死生観と『おくりびと』を中心に(Ⅱ)」でも論じたが、『ラヴェルスタイン』では、ラヴェルスタインが死後の生を信じていなかったことが何度か語られ、強調されている (60, 162, 222)。これに対して、チックは死後の生を信じているかのように書かれている。例えば、チックがラヴェルスタインの伝記に着手できずに迷っていた時期にロザムンドと取り交わす会話で、チックは「ラヴェルスタインは来世を信じていなかった。・・・私は死んだ人間とあの世で会え

ると想像する人間だ。そして、兄弟、友人、従兄弟、伯父や伯母が・・・」（“Ravelstein didn't believe in an afterlife. . . . I'm the one who imagines seeing the dead persons on the other side. And brothers, friends, cousins, aunts and uncles . . .”）（162-63）と言っている。また、チックがラヴェルスタインに誰がラヴェルスタインの後を追いそうかと尋ね（which of his friends were likely to follow him soon）、ラヴェルスタインがチックの顔色や皺をじっと観察して、チックの可能性が高いと言うシーンでも、チックは次のように書いている。

Did he mean that I would be the first of his friends to join him in the after-life? This was what the tone of our exchange suggested. But he didn't believe in an afterlife. (222)

ここでもラヴェルスタインは来世を信じていなかったとあるが、続いてラヴェルスタインはチックに、死をどのようなものと想像しているかと尋ね、これに対してチックは「絵が止まる」（I said that the pictures would stop）と答える。が、チックはさらに「誰も絵を放棄できない—絵は続くかもしれない」（No one can give up on the pictures—the pictures might, yes they *might* continue.）と考える。チックの思考は続き、肉体は朽ちるだろうが、誰も心の深いところでは、絵が止まるとは信じていない（The flesh would shrink and go, the blood would dry, but no one believes in his mind of minds or heart of hearts that the pictures *do* stop.）と考えている。こうしたチックの思考が「人は、ラヴェルスタインのような人間を簡単には死に引き渡さないのだ」（You don't easily give up a creature like Ravelstein to death.）という小説の最終文に繋がっている。

このように死後生についての考えは、ラヴェルスタインとチックは対照的であり、ここでも相補関係があるが、ではベローの境位はどの辺にあるのだろうか

か。これまでの議論では、ラヴェルスタインとブルームの距離、またチックとベローの距離は小さいと考えてきたが、死後生についてはチックとベローの距離は慎重に測る必要があるかもしれない。というのは、ベローは晩年には死後の生を願いながらも、死後も靈魂が存在するかどうかについては、確信がもてなかった節もあるからである。確かにベローは、町田氏が指摘しているように、1989年のMarian Christyとの対談で、死によって「身体は物質に帰る」(The body returns to the sphere of Matter.)が、「私はそうした科学的な見方に疑いを抱いている」(I have my doubts about the scientific view.)と言い、「とても面白く、聡明で、優しく、美しい人がいるが、死がそういう人たちを消滅させるという考えを受け容れることはできない」とも言っていた(町田24参照, Atlas 580)。こうしたことから、ベローは心情的には靈魂の不滅、あるいは死後の生を願っていたと推論できると思われる。しかし、ベローは1994年、魚のシガトキシン毒にあたり、生死の境をさ迷った後には、町田氏も指摘しているように、死後生について懐疑的な発言が見られる。ベローは、1997年の*New York Times* (26 May) のインタビューでは、「死後の生を信じているかどうか尋ねられたら、私は不可知論者だと言うであろう」(町田27)と言い、1998年のRamona Kovalとの対談(Radio National)では、「私は死後の生については何も知らない。空想の中でそれに好意をもっているということ以外は。私は死後の生について強い好意をもっており、少なくとももう一度亡くなった親族を見たいと思っている (I don't know anything about life after death, except that in my fantasies I favour it. I'm strongly for it, and I'm hoping for at least one more view of my dead . . .)」と言っている。このように晩年のベローは、死後も靈魂が存在するかどうか確信がもてなかったようであるが、これがラヴェルスタインとチックの死生観の対照、あるいは併置という構造となって表れていると考えることもできる。

4

チックの妻ロザムンドは小説冒頭のパリのシーンから登場し、小説の約3分の1を占めるチックの発病と救急搬送、集中治療室での必死の治療、リハビリテーションに関わり、分量的にも重要な人物となっているが、『ラヴェルスタイン』のメッセージを考えると、その存在は内容的にも極めて大きいと思われる。ペローの5番目の妻 Janis は、実際にブルームの教え子であるが、小説のなかでロザムンドは正に教師ラヴェルスタインの教えを実践しているからである。それによって、小説前半のラヴェルスタインに関する伝記的記述と、後半の生死をかけたチックの病闘記が見事に繋がっていると言える。

ラヴェルスタインにあっては、愛 (love) こそが人間の最高の機能とされており、愛は彼の著作を貫くモチーフとなっていた (Love is the highest function of our species—its vocation. This simply can't set aside in considering Ravelstein. He never forgot this conviction. It figures in all his judgments.) (140)。生死の境から生還したチックは、夫の回復に向け献身的に尽くしたロザムンドに対する感謝でいっぱいである。もしロザムンドの的確な判断がなく、Saint Martin に留まっていれば、朝までに死んでいただろう (If I had stayed on in Saint Martin I should have died before morning.) (205)。もしロザムンドが病院への急送を手配せず、ボストンの自宅で眠っていたら、死んでいただろうとチックは回想する (By some faculty invisible to me she recognized that I was in desperate trouble. “You would have died in your sleep,” she later said, and she went on trying to reach the doctors.) (204-05)。チックはまた、ローザは夫を愛していたと振り返る (—she loved her husband. Love found secret support among these nurses in the end zone, eighty percent of whose cases ended in the morgue.) (220)。ロザムンドの熱心さに動かされて、看護師たちは規則を緩めて、彼女が集中治療室に寝泊まりするのを許したのである。そん

な中で、ローザはチックが次の世紀まで生きるだろうと自信をもって励ました (She told me, confidently, that we would live to be very old, well into the coming century) (221)。ロザムンドはラヴェルスタインやチックより、ずっと深く愛について知っていたのである (Rosamund had studied love—Rousseauan romantic love and the Platonic Eros as well, with Ravelstein—but she knew far more about it than either her teacher or her husband.) (231)。

Joel Salzberg は、ロザムンドが歴史に基づく人物としても、あまりに良すぎて真実とは思えないと述べているが (Rosamund, even as a historically based figure, seems too good to be true) (45)、果たしてそうであろうか。ロザムンドのモデルのあるベローの妻 Janis は、ブルームの薫陶を受けた才媛であるばかりでなく、優しく美しい人であり、筆者が2001年にお会いしたときも、短時間であったが芯がありながらも暖かな人柄が偲ばれた。それは Atlas が伝記で描いた Janis 像と重なる。プラトンの愛とルソー的の愛を身をもって示す Janis によって、ベローは初めて永続する愛を知ったのかもしれない。ベローがブルームへの弔辞に述べたように、ブルームは多くの人々を感化した。「変化」、change がキーワードであった。4回もの離婚を経験したベローの心は、Janis によって変わったとも考えられる。とすれば、小説『ラヴェルスタイン』は、ベローの「愛の賛歌」でもあるだろう。そして、これはベローが妻 Janis、家族、友人、そして読者に残した遺言とも言えないだろうか。

引用文献

Atlas, James. *Bellow: A Biography*. New York: Random House, 2000.

Bellow, Saul. "Allan Bloom." *It All Adds Up: From the Dim Past to the Uncertain Future: A Nonfiction Collection*. London: Secker & Warburg, 1994.

276–79. Delivered at Bloom’s funeral service, 9 October 1992.

———. *The Dean’s December*. New York : Harper & Row, 1982.

———. “Foreword.” *The Closing of the American Mind : How Higher Education Has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today’s Students*. Allan Bloom. New York : Simon & Schuster, 1987.

———. “A Matter of the Soul.” *It All Adds Up : From the Dim Past to the Uncertain Future : A Nonfiction Collection*. London : Secker & Warburg, 1994. 73–79. Rpt. from *Opera News*, 11 January 1975.

———. “Mozart : An Overture.” *It All Adds Up : From the Dim Past to the Uncertain Future : A Nonfiction Collection*. London : Secker & Warburg, 1994. 1–14. Rpt. from *Bostonia* magazine, Spring 1992. Delivered at the Mozart Bicentennial, 5 December 1991, in Florence, Italy.

———. “The Nobel Lecture.” *American Scholar* 46 (Summer 1977) : 315–25. Delivered in Stockholm on 12 December 1976.

———. *Ravelstein*. New York : Penguin Books, 2000.

Bloom, Allan. *The Closing of the American Mind : How Higher Education Has Failed Democracy and Impoverished the Souls of Today’s Students*. New York : Simon & Schuster, 1987.

Canales, Gustavo Sánchez. “Life, Death and Aristophane’s Concept of Eros in Saul Bellow’s *Ravelstein*.” *Saul Bellow Journal* 19.2 (Fall 2003) : 8–18.

Freeze, Eric. “Reading *Ravelstein*.” *Saul Bellow Journal* 19.2 (Fall 2003) : 19–30.

Koval, Ramona. “Saul Bellow.” *Books and Writing*. Radio National. 17 April 2005 <<http://www.abc.net.au/rn/arts/bwriting/stories/s1342358.htm>>.

半田拓也「ソール・ベロー序論—死生観と『おくりびと』を中心に（Ⅱ）」『福岡大学人文論叢』42.2（September 2010）：1–35.

町田哲司『ソール・ベローⅡ—“Soul”の伝記 序説—』大阪教育図書, 2006.

佐伯彰一氏『作家伝の魅力と落とし穴』勉誠出版, 2006.

Salzberg, Joel. “The Importance of Being Saul Bellow: Narcissistic Narrative and the Parodic Impulse in *Ravelstein*.” *Saul Bellow Journal* 19.2 (Fall 2003) : 36-52.